続 徒然 つれづれ

公共の精神

桑野　巍

春風駘蕩といえば春ののどかな様子を現す言葉だが、現実は決してのどかではない。異常気象もあるがいま私たちはアゲンストの強風にさらされている。永田町周辺の“無責任風”、経済界の国際的“偏東風や偏西風”が強く、生活者はその風を正面に受けている。潮目が変わろうとしているのだろうか。生活者の中には「先のことはよくわからんが、なるようになる。行きつく所まで行った方がよい」という達観組もいるし、「アゲンスト風が吹くほど奮い起つ。いまこそ知恵を」という勇気組もかなりいて頼もしい。

「これも必要な試練」と思っているが、欲深い住民は何を考えているのだろうか。行政に対しては「これもしてほしい。あれも頼むよ」とねだっていないか。その欲求は知らず知らずの間にふくれ上がり、一段上の飽食現象をみせ始めているように思う。生活者が常に豊かさを追い求め、自分たちは他の誰よりも幸せに生活し、楽しい人生を送りたいと願っていることはわかるが、これがほんとうの成熟社会なのかと思うこともある。

そこで「先生、近ごろの世相をどう見ていますか」と真面目な大学教授に尋ねたら、彼は「未熟な人は沢山いるし、いつの時代にも“ボヤキ王子”が存在するのが成熟社会なのでは」と皮肉な答だった。ただ成熟社会とはどんな社会なのか、衣食住職の物差しをどこに置くかという問題もあるので「一概には言えない」と彼らしい発言だった。そのあと彼は現代社会の風潮を肯定した方がよいかどうか自身も迷っており「住民自身も目の前のことすら処理できない時代。どんなことでも誰かがやってくれると思い、行政にぶら下がっている受け身型の態度では」と分析した。

それではと言って私が実例を挙げてみた。ごみの収集日でもないのに戸建て住宅に住むAは自宅の門の前で生ごみの入ったビニル袋を見つけた。Aの自宅の前は水量の少ない小川だ。Aは「誰が置いたんや。マナー知らずめ」と思いつつどう処理したか。他人が見ていない時に小川に捨てることはしなかった。Bに相談したら、夜遅く隣りの家の前にこっそり置く方法があるよと悪知恵をくれた。Aは犯人を見つけることもしなかったし、Bの知恵も参考にせず、Aは自宅に持ち帰り次のごみ収集日に自分たちが排出したごみ袋と一緒に出して持って行ってもらう方法を選んだ。わかり難いので見取り図を書きながら説明したら彼は「面白い例だ」と前置きして「Aは立派なお方」とその処理の仕方を評価した。

いまの都市社会は隣人の顔も知らない疎遠ぶりでコミュニケーション不足、近隣だんまり社会を構成している。個人主義と個人の責任回避が流行しているゆえか、住民の品位向上など土台無理な注文で、Aのようなマナーを持ち合わせていない。天災の時の住民行動が心配という彼は「住民の80％がAのような行動をとってくれれば被害は少なくてすむよね」と言い、「ちょっと」という第三者を欲しているようでもあるが「Bの方式行動が案外多いのかな」と勘繰りの態度をみせた。

「常識と非常識は時とともに半転するというが区別が出来ないでいるのか。私たち自身が何を目指し、どんな社会に住みたいかをもう一度考え直さなければならない時かも知れないですよね」。教授の一歩下がった謙虚な“住民観”は読み取れたが、古い人たちの部類に属する先輩たちが公共の精神やマナー優先を説いても若い人たちは聞く耳を持っていないのかも。授業後、彼は「艱難辛苦（かんなんしんく）とはどんなことか」と学生に問いかけたが、学生たちは「何のこと」と問い返したという。学生たちに説明しても無駄と思いながらも、彼は「どこの世界であれフラットな道ばかりではないよ」と言い聞かせたそうだ。

子供、学生、若い親たちや高齢者が自分本位に行動し、楽しむことは結構だが、いまや公共の精神とは何かを学ぶ必要もあろう、とお節介気味に考えてみた。その矢先、ある会合で外国籍の高名な評論家の話を聞いた。彼は「日本国も地域社会も学校も親たちも過保護状態で鍛錬不足。ひ弱な体質丸出しで、これでは本当の豊かな社会を自分のものにできない」と注告してくれた。耳が痛かった。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）